

Title	桃源郷の「黄道真」：本邦における画題受容の一側面
Author(s)	中本, 大
Citation	語文. 80-81 p.86-p.92
Issue Date	2004-02-29
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69028
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

桃源郷の「黄道真」

——本邦における画題受容の一面——

はじめに

本邦近世初期成立、日本初の画題集成『後素集』はなんとも不可解な一書である。『事文類聚』や『白氏文集』を委細に引用し、典故を厳密に尊重しつつ「西湖図」について解説する一方、「毛宝助亀図」なる画題については、

毛宝晋世人、小兒白亀ヲトラエテコロスヲ、債ニカヘテカイトリ、海上ニハナス体ナリ

と『蒙求』や『和漢朗詠集』の注釈書等に見える「毛宝白亀」の故事とは微妙に異なる、巖谷小波の「浦島太郎」を髣髴とさせる記述を加えるのである。しかも『後素集』での所載は巻第二の「隠逸」部で、武将毛宝の配下の武人に関わる逸話として認識されていたと言ひ難く、出典を正確に把握していたとは考えられないのである。このように、典拠の問題を取り上げても、その考察は容易ではないことが予測されるであらう。しかし、編者である狩野一溪の伝記の詳細や、その執筆動機が不明である現在、『後素集』の特質を解明するためには、出典を中心に、その項目や記載内容を徹底して検討

する以外に方法はあるまい。

本稿では、「神仙」部に収められる「桃源図」の記述を端緒に、『後素集』が採録する画題の背景を確認することを目的としたい。『後素集』神仙部所収「桃源図」の解説は以下の通りである。

桃源図

漁人桃源ニユキテ黄道真ニアヒタルテイ也。桃源桃ヲキトロコ也

一

「桃源図」は著名な画題である。中国におけるその盛行は、『歴代題画詩類』巻第三十一「古蹟類」に収められた三十首に及ぶ夥しい題画詩の作例によっても確認される。⁽²⁾ 収録作品は唐代の詩人、韓愈の「桃源図」詩を筆頭に、唐・宋・元・明の各代に互り、絶え間ない受容と敬慕の歴史が付度されるのである。中でも元代の作例は豊富で、銭選・趙孟頫・黄潛・呉師道といった著名な士大夫が作者として名を列ねている。

桃源郷の故事が本邦でも周知であったことは言うまでもない。そ

中 本 大

してその源泉は、「武陵桃源」の標題を掲げる『蒙求』古注釈書にも引用される陶淵明の「桃花源記」であつたと考えてよいだろう。

『和漢朗詠集』では「三月三日 付桃」部で王維の「桃源行」の一聯を採録するのをはじめ、「仙家 付道士隱倫」部でもこの逸話を踏まえる本邦の作例を掲げている。永濟注がその注釈で両句ともに「桃源記」に言及するように、日本における桃源郷説話の受容と確立には陶淵明の「桃花源記」が不可欠だったのである。その本文を文禄五年刊『徐狀元補注蒙求』から引用しておく。

陶潜桃花源記云、晋太元中、武陵人挿魚、緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花林、挾岸數百步、中無雜樹、芳花鮮美、落英繽紛、漁人甚異之、復前行、欲窮其林、林盡水源、得一山、山有小口、髣髴若有光、便捨船從口入、初極狹、纔通人、復行數十步、豁然開朗、土地平曠、屋舍巖然、有良田美池桑竹之屬、阡陌交通、雞犬相聞、其中往來種作、男女衣着、悉如外人、黃髮垂髫、並怡然自樂、見漁人大驚、問所從來、具答之、便邀還家、為設酒、殺雞作食、村中咸來問訊、自云先世避秦亂、率妻子邑人、來此絕境、不復出、遂與外人間隔、問今是何世、乃不知有漢、無論魏晉、此人為具言、聞皆歎惋、余人各復延至其家、皆出酒食、停數日、辭去、既出、得其船、便據向路、処処誌之、及郡詣太守、說太守即遣人隨往、尋向所誌、遂迷不復得路。

こうした状況は時代が降ってもほぼ同一であった。数多くの用例の中から、その体裁が『後素集』に類似する『連集良材』を例として挙げておく。同書「桃源」の項は以下の記述である。

桃源

晋ノ太元ノ年武陵ト云処ノ人魚トランタメニ舟ヲサシテ谷ノ流

ヲ行ニ道ヲ失テ桃林ノキシヲサシハサメル処ニ行カヽリ又百歩ノ内コト木ナシ落英繽紛タリ猶水上ヲ尋ユクニ一ノ山アリ山ニ少シキ江アリ舟ヲ捨テ歩ミ行ニ人家アリ田地アリ鶏犬アリ男女アマタアリ漁人間之答テ云我ハ秦時世乱ヲノガレテコヽニ来テヨリ通フ事ナシトイヘリ桃源是也秦ヨリ晋マデ五百余歳也奇犬吠フ花ニ声流ルト江桃之浦ニ云ルコノ心ナリ

「桃花源記」の概略を記した後、傍線部、『和漢朗詠集』「仙家」部所収句（「神仙策」都良香）に言及するのである。

如上、本邦での趨勢を考えると、『後素集』の記載には違和感を抱かざるを得ないであろう。陶淵明の「桃花源記」には桃源郷を訪れた漁人にも、迎えた邨人にも、また最後に登場する太守にも、明確な氏名は附されていないから不足である。『後素集』が記す「黃道真」とはいったい何者なのか。狩野一溪は何を以ってあまりにも有名な逸話に基づく著名な画題に対して、こうした解説を記したのであろうか。

二

「黃道真」はもとより、狩野一溪の創作ではない。実はこの人物、本邦室町時代から近世初期にかけて、位相は異なるものの複数の書物の中で、断片的に言及されていたのであった。それがどのように結ばれて一本の線となり、『後素集』の記載に結実したのであろうか。以下、詳細に検討することにしよう。

「黃道真」の名が本邦ではじめて確実に記憶されたのは、室町時代を通じて漢籍受容の一大窓口であった五山禪林だったと考えられる。その根拠はなにか。実は五山の学僧にとって必読書であった

『韻府群玉』に「黄道真」の名が挙げられているからなのである。すなわち、上平声十一、「眞」部の「人名」には、

黄道——武陵漁人入桃源　　〔増統会通韻府群玉〕卷之七

と明記されているのである。惟高妙安の講義を聞ききした抄物『玉塵抄』の該当部分を確認しておこう。

黄道——武陵漁人入桃源、武陵ノ桃源ノ心カ武源ト所ハナインソ黄道真ハ漁人トアリ排韻ニモナインソ方輿勝覽第三十常德府ノ桃源ノコトヲノセタ所ニ漁人黄道真舟ヲ泛テ流ニサカノボツテ上エコイデ桃源ノ水ノミナカミエイタソ桃源ノ詩ドモ多ヲノセタソ、黄——カコトノコマカナコトハナインソ

この記載、内容はもちろん、未詳の人名を検索する際の五山僧の手順が窺える興味深い部分でもある。記載内容を順に検討していこう。

まず、引用傍線部、『韻府群玉』の本文について確認しておく。

現在通行する『韻府群玉』諸本と『玉塵抄』で引用される本文とは「桃源」を「武源」とする異同があるものの、これについては未勘。惟高の依拠したテキストでは「武陵漁人入桃源」となっていた。しかしこれでは意味が通じないので、「武源」とは「武陵桃源」を簡略化した表記である可能性を示唆している。

次に、「黄道真」については第一に、『排韻増広事類氏族大全』にその記載のないことを確認している。同書が本邦五山禅林における最も簡便な人名録として、いかに広く利用されていたかを裏付ける証左でもある。その後、惟高が言及したのは『方輿勝覽』であった。この書は『事文類聚』の編者としても広く知られる宋末元初の士大夫、祝穆が編纂した中国地理に関する類書で、検索簡便な地理書としてしばしば五山僧の著述に見える一書である。その巻第三十、

「常德府」の「桃源山」（宋本に拠る。清代の校訂本等、「桃源洞」とする本文もある）の記載内容を概観するのである。その上で、『方輿勝覽』には「桃源」に関わる往古の詩文が多数掲載されるものの、「黄道真」の詳細を記さないことを確認し、考証を終えるのである。惟高のこの口吻からして、「黄道真」の伝記が本邦五山禅林で人口に膾炙していたとは考えにくいであろう。桃源郷の逸話に関係する人物として、『韻府群玉』や『方輿勝覽』に言及されるものの、その詳細は不明、というのが文壇での理解であったと考えられる。

その『方輿勝覽』の当該所の原文は以下の通りである。

桃源山

○任安貧武陵記晋太康中武陵漁人黄道真泛舟自沅沔流而入道真既出白太守劉歆歆與俱往則已迷路與陶記略同

『武陵記』逸文からの引用である。最後に記されるように陶淵明の「桃花源記」と大略、同一内容で、漁人の名を明らかにすることのみが眼目であった。なお、漁人「黄道真」に言及する權威ある出典として『太平御覧』がある。斯書巻第四十九・地部十四「黄聞山」項ではやはり『武陵記』逸文を出典として

武陵記曰、昔有臨沅黄道真、在黄聞山側釣魚、因入桃花源。陶潜有桃花源記。今山下有潭、立名黄聞。此蓋聞道真所説、遂爲其名也。

という文辞を掲げるものの、この記述は『事文類聚』等他書には踏襲されず、五山での影響を考慮する上には慎重でなければならぬであろう。なお、『韻府群玉』では上平声十三「元」韻「源」字門で「武陵桃源」を挙げるものの、『玉塵抄』当該部分では「桃花源

記」を訓読するのみで、黄道真には言及していない。『古文真宝前集』には巻六「七言古風長篇」に韓愈の「桃源図」が、巻九「行類」に王安石の「桃源行」が収められているものの、やはり「黄道真」に通じる理解は示されていない。なお、室町時代初期の禅僧、惟肖得庵の「桃花源図」詩七絶に「黄郎世上有何累 便捨釣舟休道帰」の一聯があるものの、この「黄郎」は「黄頭郎」、すなわち船頭の意で、黄道真とは無関係であると考えられる。

さて、「黄道真」が本邦五山禅林において認識されていた人物であることは確認できた。しかし「黄道真」を桃源郷に迷い込んだ漁人とする五山での理解と、迷い込んだ漁人を迎えた人物とする『後素集』の記載には齟齬があることに留意したい。『後素集』における「黄道真」はあくまで桃源郷の住人なのである。

三

「黄道真」はいかにして桃源郷の住人になったのか。これこそは一溪の曲解、あるいは創作なのであろうか——この仮説はまたしても否、である。例えば『詩学大成抄』（米沢本）地理門「溪」部所収「避秦人」の項に興味深い記述がある。

○避秦人○武陵溪ノコトナリ、秦ノ始皇ノ乱ヲサケテ、桃源エカクレテイタ者アリ、髪黄ナ老人ガアリテ漁人ガ武陵溪エイタレハ、老人ニ逢タツ、老人カ、吾ハ秦ノ乱ヲサケテ、コヽニイタト云ソ、秦カラ漁人ノ時分ハ晋時ソ、凡七百年ハカリノホドソ、仙境チャホドニ老人モ仙人ニナリテイキタソ

傍線部「髪黄ナ老人」は陶淵明の「桃花源記」に見える「黄髮垂髮、並依然自樂」を敷衍した表現とも考えられる。しかもここでは明確

に漁人に応対した「黄髮ナ老人」を傍線部、「仙境」である桃源郷に住まう「仙人」と記しているのである。『玉塵抄』においては桃源郷の黄道真について記することを躊躇した惟高が、『詩学大成抄』において『後素集』に近似する理解を示していることは注目されるだろう。ただし黄髮の仙人の名を黄道真とする説が確定するためには更に時代を降り、別の明本の新渡を待つ必要があったと考えられる。『列仙全伝』がそれである。

『列仙全伝』は中国明代の萬曆年間に陸続と刊行された帯図本の一つである。『仙佛奇踪』・『三才図会』・『日記故事』等とともに、本邦では画師の粉本として広く利用されたことは周知であろう。林羅山が珍重したことも著名である。さて、この『列仙全伝』の末尾、巻之九は補遺部で、図像を伴わず、仙人名とその伝記の概略がまとめて記されている。その中に「黄道真」が含まれているのである。

黄道真。晋武陵人。棄俗居高吾山修道。後乘白鹿而去。

一行に満たない短文である。「晋」・「武陵」という共通点はあるものの、『韻府群玉』や『方輿勝覧』には記されない明らかに異なる認識が示されているのである。「高吾山」は不明。『山海経』に「鉤吾山」なる地名が見えるものの、関係は不詳である。「乘白鹿」、白鹿に乗る仙人と言えは『事文類聚』「鹿」門で、

乗白鹿

老子乘白鹿下託於李母 崔玄山李母碑

と記されるように、第一に老子が想起されるであろう。『列仙全伝』における黄道真には、仙中の仙とも言える、老子のイメージが重ねられているのである。

『列仙全伝』のこの記述が近世初期の本邦漢画壇、就中狩野一溪

に大きな影響を及ぼした確証はない。しかし、「漁人が桃源郷で黄道真に邂逅した」という『後素集』の記載が、『詩学大成抄』と『列仙全伝』の記述を併せることで理解されるものであることは興味深いのである。

四

再度、確認をしておこう。「黄道真」は近世の画人にとって決して辿りようのない未知な人物ではなかった。五山文壇やその所蔵する典籍と交渉のあった人物であれば、その情報の断片を得ることは可能であった。一方、中国宋・元代の類書の記述から伝播した桃源郷の黄道真は明代に至り、仙人としての明確な実像を伴って描かれるようになったのである。前掲、『歴代題画詩類』卷三十一「古蹟類」には明代の詩人、謝承華の次の長詩を収めている。^⑦

桃源図

武陵桃花先破春	漁郎偶爾來問津
山重水複得雲竇	風馳浪駛臨溪濱
何知卒然八異境	人家遠近通芳隣
石田茅屋與世隔	云是先世來避秦
桑麻接地足衣食	冠裳結伴無疎親
我聞嬴氏乱天紀	儒坑典焚兇不悛
大張淫暴戕物類	俯視四海皆愚民
天生性良天亦恤	故教善衆感嶙峋
仙邪人邪香莫測	歷世已久跡已陳
縱然有仙亦常事	神仙原是人間人
昌黎臨川各云遠	地下不起黃道真

坡翁詩破萬世惑 千載淵明蘇為申

作者の謝承華は十五世紀後半から十六世紀前半にかけての中国明代、成化・正徳・嘉靖年間に活躍した江南、金陵の詩人である。登第こそしなかったものの、十才子の一、朱応登らと親交を結び『明史』列伝・文苑二、詩画に優れたことがその墓碑銘「野全謝先生墳墓志銘」（『国朝献徵録』所収）に記されている。その作品『桃源図』十二韻では、陶淵明の「桃花源記」をたどりながら、先人たちの詩作を反芻し、現代にも通じるアイロニーを鏤めつつ達観とも言うべき諦念を示している。その一節に「地下不起黄道真」とあり、「黄道真」を今の世にはもはや姿を顕さない仙人として描いているのである。『歴代題画詩類』所収の他の作例に、「黄道真」に言及したものは見出せず、謝承華の本邦への影響はもとより不明ではあるものの、黄道真が中国の「桃源図」に関する題画詩でも言及されていたことは、『後素集』の記述を考える上で重要な示唆を与えることは間違いない。

『後素集』の記述は荒唐無稽なものではなかった。それは五山禅林を中心とする本邦室町時代の学識を背景とする一方、同時代の中国の典籍や絵画の影響をも想定させる近世初期の重要な文化的指標とも見なし得る文辞の結実だったのである。

五

ならば、である。冒頭に掲げた「毛宝助亀図」の解説も、なんらかの背景を有するものであろうか。

『後素集』が記す「毛宝助亀図」には著名、しかも狩野一溪同時代の作例がある。妙心寺塔頭天球院襖絵中の一図に『後素集』の

記載通り、童子から贖った亀を水辺に放す老翁の姿が描かれているのである。作者は狩野山雪。北野良枝氏が指摘するように、その画題や構図と『後素集』の記述に浅からぬ関連が想起される画人である。

その毛宝助亀説話の梗概、既に指摘したように、『蒙求』の注釈や『太平広記』等の典拠では、毛宝自身の逸話ではなく、その部下の一軍人の故事として理解されていることを確認しておきたい。『蒙求』所収「毛宝白亀」で引用される注釈は以下の通りである。

晋毛宝字碩真、荊陽陽武人、進征虜將軍、豫州刺史、与西陽太守樊峻、以万人守郟城、石虎遣三万騎攻之、城陷、宝等率左右突圍出、赴江死者六千人、宝亦溺死、初宝在武昌、軍人有於市買得一白亀、養之漸大、放諸江中、郟城之敗、養龜人被鎧持刃、自投於水中、如覺隨一石上、視之、乃先所養白亀、長五六尺、送至東岸、遂得免焉（文祿五年刊『徐狀元補注蒙求』に拠る）

すなわち、武將毛宝の配下の武人が武昌の市で一匹の白亀を購入し、それを大きくなるまで養った後、川に放したことがあった。後、敗戦で死を覚悟し、川に身を投じたところ、以前育てた亀が成長し、東岸まで送り届けた、というものである。『太平広記』巻第一百一十八「報応」十七「異類」所収話「毛宝」（出典は『幽明録』）もほぼ同一である。

この逸話が毛宝自身の報恩譚に変容していく様を述べることは本稿の目的ではないものの、例えば『和漢朗詠集』「白」部採録の一聯、

毛宝亀帰寒浪底 王弘使立晚花前

について永濟注で次のような注釈を附していることを確認しておき

たい。

此ハ胸ノ句也。上句ハ、斉ノ国ニ毛宝ト云人、江ノホトリヲユクニ、人アリテ、白キカメノ、コウノナカサ四尺ナルヲトリテ、モトリケルヲ、毛宝アハレミテ、カヒトリテ、江ニハナチツ……後略。

すなわち、亀を購入したのは毛宝自身、しかも諸書の乗亀説話や浣川版御伽草子「浦島太郎」のように不遇な亀を「アハレミテ」、川に放したことが記されている。延慶本『平家物語』第二中「右兵衛佐謀叛発ス事」に見える「昔ノ楊宝ハ雀ヲ飼テ環ヲ得、毛宝ハ亀ヲ放テ命ヲ助カルト云ヘリ。」も同じ理解であろう。こうした描写は浦島説話と混同した本邦での改編と考えられるのであろうが、実は中国においてもこうした理解は既に存在していたのであった。先の「黄道真」の考察でもふれた、『韻府群玉』がそれである。『韻府群玉』巻第二十三・上平声「皓」韻「宝」字門「人名」の「毛宝」で、

毛——放白亀

と記すのをはじめ、同巻第四「支」韻「亀」字門でも「放白亀」の項を掲げるのである。当該部分の『玉塵抄』の記述は以下の通りである。

放白亀 毛宝釣得白亀、贖放之、後戦敗、投江、躡物至岸、視之乃所放亀也 搜神記

古文真宝ニアリ、釣得——毛ガ釣テ得デハナイソ、漁人ガツリエタヲ毛ガゼニヲダイテカウテ水エハナイテイケタソ、贖ハシウノ音ナリアカウトヨムソ買ウコトソ、ノチニ合戦ノソコネテクツレテニクルニ江ニトビ入タソ、足ニ物ガアツタヲフンデムカイノ岸エイテミタレハ、前ニカウテタスケタ亀ソ、畜生ノ恩ヲ

すなわち、『韻府群玉』本文の「毛宝釣得」の誤りは正すものの、亀を贈い、川に放したのを毛宝自身とする認識は永済注や延慶本と一致している。報恩は毛宝自身とするのが近世以前、本邦での一般的な理解だったと考えられるのである。その意味では『後素集』の記述はそうした認識を踏襲したものと見做し得るのである。

だが、『後素集』に記された「小兒白亀ヲトラエテクロスヲ」の詞章は納得できないのである。『後素集』が記すこのプロットが一連の浦島子説話や室町時代物語では記されないものであることは周知であろう。三浦佑之氏が『浦島太郎の文学史』（一九八九、五柳書院）で詳しく考察するところである。つまり、『後素集』の記述が逆に、本邦における浦島説話の変容に影響を及ぼしていると考えられるのである。三浦氏の考察に拠れば、亀の報恩譚が整えられるのは御伽草子以降、子供の虐待のプロットに至っては巖谷小波まで降るとされる。その両者を併せ持っていたのが『後素集』の「毛宝助亀図」の解説だったのである。図像が文芸に及ぼした影響の大きさの一端が想像されるであろう。

おわりに

以上、『後素集』に収められる二つの画題解説の背景を検討してきた。そこから得られた結論は、説話生成に関わる図像表現の影響の大きさであった。一つの著名な故事に新たな解釈が付加される時、新たな物語へと変容していく際、「画題」のもたらす影響も決して小さくはない、ということを顕彰したい。言い換えると、中国から齎された事物（もちろん図像も含まれる）をどのようにに評価、理解

し、日本人の特性に合わせていかに変容させてきたかを考察するためには、「画題」に注目し、「画題」を辿ることも最も有効な方法の一つであると考えられるのである。

近世初期、本邦初の画題集成を残した狩野一溪重長は、そうした意味で先駆者であった。彼は日本人が享受した漢画系の画題を集成することで、日本の文化とは何か、日本人とはどういう存在か、という命題を問い続ける営みを繰り返してきたとも言えるのである。

注

- (1) 『後素集』本文は東北大学附属図書館狩野文庫所蔵本文に拠る。
- (2) 本文は四庫全書所収本文に拠る。なお、台湾の国立故宫博物院刊行の展覧会図録『淵明逸致特展図録』（一九八八）にも宋・元・明・清にわたる「桃源図」の作例が採録されている。
- (3) 立命館大学西園寺文庫所蔵寛永八年刊本に拠る。
- (4) 新抄物資料集成（清文堂出版）所収叢山文庫蔵本に拠る。
- (5) なお、太守劉歆の名を記す文献に『三才図会』がある。同書地理十卷「桃源洞図」の解説は先行類書をほぼ踏襲した内容ながら、「郡下詣太守説如此」の文辞に続いて「太守劉歆」の割書、細字注を附している。
- (6) 中国古代版画叢刊（上海古籍出版社）第三冊所収本文に拠る。なお同じく明代万曆年間刊行の帯図本として注目される「仙佛奇踪」では冒頭「長生訣」で「道真」なる道士に言及するものの、黄道真と直接つながるものではないと考えられる。
- (7) (2) と同じ。
- (8) 北野良枝「天球院上間」の間障壁画に関する一考察——狩野一溪著『後素集』との関連について——（『國華』一二五三号・二〇〇〇・三）参照。
- (9) 「画題」の概念既定については、拙稿「七賢図」という「画題」（『論究日本文学』第七四号・二〇〇一・五）参照。